
 私がなぜ現在の科目を選んだか

「臨床薬理学（薬剤部）」

信州大学医学部附属病院薬剤部

井出 貴之

薬剤師の就職先は病院をはじめ、官公庁、製薬企業、保険薬局、ドラッグストアなど多岐にわたる。私は幼少の頃から薬剤師は「病院」というイメージが強かったため、薬学部在籍中から病院へ就職しようと決めていた。出身大学は東京都にある北里大学で、薬学修士として修了した私は、学問にもまだ上（博士）があることから、将来、目指すことになった際、相応しい環境が良いであろうと考え、県内（唯一）の大学病院である信州大学医学部附属病院に就職を決めた。

入職当時、上司であった前薬剤部長・大森 栄教授は、ある時、このようなことを話して下さった。「私の役割は、薬剤部員一人一人のレールを敷いてあげることだ」と。

医師に専門医、認定医があるように、薬剤師の領域も専門薬剤師、認定薬剤師の制度が発足し、私は上司

 私がなぜ現在の科目を選んだか

「消化器外科」

信州大学医学部外科学教室

消化器・移植・小児外科学分野

山崎 史織

「“やりがい”を売りにしてはいけない」某大学の教授が言っていたのを思い出しました。医者の世界にやりがいのない診療科なんてないと思います。では、なぜ私は今ここにいるのか、少し思い出してみました。

学生の頃、臨床実習の消化器外科で最初に感じたのは、“その選択は本当にその患者さんのためになっているのか”を常に考えているということでした。自らの手でメスを入れるということは、その分責任も思い入れもできるものではないでしょうか。手術をすることは、自身の技術や知識がその患者さんのアウトカムに直接結び付きます。だからこそ自らの技術を磨き、常に学び続けるモチベーションにもなります。

そして何より、消化器外科の手術はとても面白いです。一般外科ともいわれるように、ありとあらゆる疾患や手術、手技を習得する必要があります。いくら勉強して、修練を積んでも飽きません。手術だけでなく、

から「がん」に関する専門、認定を取得するよう命ぜられた。取得を目指していた最中に、身内が「がん」と診断された。そこで化学療法の副作用を実際、目の当たりにし、直接聴いた話は、私のその後のがん患者指導や学生教育の質を高めることになった。

数年後、私は、がん薬物療法認定薬剤師、がん専門薬剤師を取得し、院内でレジメン管理、制吐薬の適正使用ガイドラインや緩和薬物療法マニュアルの作成、外来化学療法における患者指導等に深く関わることになった。

私は現在も、がん患者と薬物療法を通じて直接対峙できる状況にある。また生涯その環境を大切にしようと考えている。なぜか？大学4年次、臨床薬学（医療薬学）という学問が薬学領域では先駆けの時代であった。その頃の教えにより、今でも臨床現場は、学びの一番大事な場所であると認識している。さらに、がん指導薬剤師の認定を取得した私は、今後も、がん医療への様々な貢献と後進の育成を中心に、自分が進んだ道をこれからも邁進していく所存である。

（北里大学大学院平12年卒）

最新の化学療法や緩和治療まで勉強しなければなりません。また、手術をしたら終わりではなく、術後管理も患者さんのアウトカムを左右する非常に大切な部分です。一筋縄ではいかないこともしばしばあり、大変な側面もありますが、立ち止まるのが苦手な私にとっては合っているのだと思います。

最後に、上司や同僚に恵まれた環境であるからこそ、私は今ここにいるのだと思います。消化器外科の手術は、どんなに上手でも1人ではできません。指導してくれる上司、相談し合える同僚、そして手術や術後管理を助けてくれる手術室や病棟のスタッフがいて、消化器外科医としての私の仕事は成り立っています。最後は人なのだと思います。

医師の働き方改革が叫ばれる昨今、コスパやQOLを重視する若手が増え、いわゆる“きつい”消化器外科医を志望する若手が減るのも納得できます。しかし、医師としての自らの成長や、患者さんのためには、時には踏ん張る時期も必要だとも思います。私はこれからも、研鑽を積んで常に成長し続けられる消化器外科医になりたいと思っています。そして、私たちの姿をみて消化器外科を志す学生や研修医が増えてくれたらうれしいです。

（信大平29年卒）